

令和4年度 アメリカ研修 個人報告書

18A093 橋本 沙奈

私は、令和5年2月21日から3月5日にアメリカ薬学研修に参加しました。研修中は主に、協定校である College of Pharmacy, Western University of Health Science (ウェスタン大学薬学部) にて授業を受け、その他にもアメリカの医療施設を見学しました。たくさんの刺激を受けながら、多くのことを学ばさせていただいた2週間でした。今回はそこで学んだアメリカの薬学部について、まとめていきたいと思います。



・薬学部への進学について

アメリカで薬剤師になるには6～8年ほど大学に通う必要があります。最初に2～4年制の専門学校や科学系の大学の学部に行き、薬学部への受験資格を得ます。その後、3～4年間の薬学部に通い、薬剤師国家試験の受験資格を得ることができます。そのため、アメリカの薬学部は、大学院のような位置付けであると言えます。ウェスタン大学薬学部の修業年限は3年ですが、今後、2.5年の修業に改定されていくというお話も伺うことができました。

・OSCEについて

日本では4年次に実施される実技試験のOSCEですが、ウェスタン大学では1～3年次に行われているようです。1年次ではコミュニケーション能力を評価し、2～3年次ではコミュニケーション能力に加え、薬に関する知識についても評価されるそうです。入学したばかりの1年次にコミュニケーション能力を評価することについて、「新しい環境下で他の学生とも良い関係を築くことができることを期待し行っている」という言葉が、印象的でした。

・薬剤師によるワクチン接種について

アメリカでは、州によって多少規制は異なりますが、50州すべてで、薬局でのインフルエンザなどの重要な予防接種が行うことができます。トレーニングを受けた薬剤師が新型コロナウイルス(COVID-19)を含むワクチン、その他小児用ワクチンを打つことができるので、風邪の流行時期などに病院で延々と待つことなく、予防接種を受けることができます。そのため、患者さんにとって非常に利便性があると考えられます。ウェスタン大学の学生もCOVID-19のワクチンを打つために、特設会場に出向き、医療に従事していたそうです。今回、私たちもオレンジを使用して、ワクチンを打つ体験をさせていただきました。いつか日本でも、薬剤師がワクチンを打つことができるようになれば良いなど、感じる場面でした。



・フィジカルアセスメントについて

薬剤師がフィジカルアセスメントを行うことで、医師の負担軽減・チーム医療の効率化・効果的な服薬指導などが実現します。そのため、薬剤師のフィジカルアセスメントが広まっています。今回、授業内で私たちもフィジカルアセスメントについて体験させていただきました。日本の大学の講義では、実際に器具を使用して人を診ることはなかったので、貴重な経験でした。就職した時にこの経験を活かして、実践していきたいと感じました。



・薬剤師国家試験について

卒業前(学士取得前)でも、「卒業見込み」であれば国家試験を受験できるのが日本の制度です。アメリカは、薬学部を修了すると、PharmD (ファーム・ディー)という学位が与えられます。学位取得前に受験できる日本とは異なり、アメリカでは PharmD を持っていないと、国家試験を受験することができません。

また、アメリカの薬剤師になるための試験は「NAPLEX」と「法規試験」の2つがあります。前者は全米共通の薬剤師国家試験で、後者は州ごとの薬事法規に関する試験です。どちらも合格すると、薬剤師として働くことができます。

・感想

机の並び方や、飲み食いが許されるという日本と異なる授業の受け方は、とても新鮮で、アメリカの自由さを感じました。また、授業でわからないことがあった時に、アメリカの学生はたくさん質問をするとお聞きしました。そのため、私たちも積極的に先生に質問をするという姿勢ができ、有意義な時間を過ごすことができました。



アメリカは日本の20年先の医療を行っているとお聞きしていました。それについて、授業や学生とのお話からだけでも、実感することができました。薬剤師ができる仕事の幅の違いや、アメリカの同じ年齢の薬学部学生がコロナ禍に医療に貢献していたことは、強く感動し、印象に残りました。日本が医療を効率良く回していくためにも、アメリカのように薬剤師が行うことができる業務の幅を広げていくべきだと、感じました。そして、私も今後の医療についていけるような人材と成長していきたいと感じました。